



# な はま てつほうの鳴る浜

もりかわしげ み しょうがくかん  
森川成美作 小学館

十二歳の竹崎長種は肥後の生家を抜け出し、肥前行きの船にしのびこんでいた。将来がない武士をやめ、博多で商人になろうと考えたのである。船の大將・鷹島竜玄に見つかるも、働き口を紹介してもらった。竜玄は長種に、商人にこだわらず「運を楽しめ」と説く。

ある日、長種は、モンゴル族のフビライが「てつほう」というおそろしい武器を準備していることを知った。異国がせめてくるかもしれない。そして、長種の「運」は大きく動くこととなるのだった。

